
中立国家の私

A R I K A

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

中立国家の私

【著者名】

ARIKA

N4222A

【あらすじ】

生きる意味は？生きる価値は？友達って？イジメと隣り合わせに生きる現代の中学生を描写した小説です。

胸の穴（上）

今思うとなんでもうと早くこいつしなかつたのかと夕暮れに赤く染まる街を見下ろしながらちょっとびり後悔している反面、ここまで歩いて来れたことと、遙か遠くに感じていた目的地が目の前まで近づいていることに驚いた。この先はこんなことになつたことに両手一杯分位の人間が驚き、コップ一杯程度の後悔が私を苛むのだろう・・・たつた一杯分。

「じゃ。また明日～」耳の奥をチクチクといやらしく突付く声が聞こえた。と、同時にオートロック式のドアが開き・・・閉まった。

そろそろ時間だ・・・私はカーボンの手すりに手を強く押し付けた。

いつもと同じく七時十五分に目が醒めた。私の体内の時計は正確で毎朝この時間に目覚まし無しで起きることができる。

ベットの横にある小窓のカーテンを開けると心地良い太陽の光が部屋を満たした。ベットの上で「うーん・・・」っと伸びをする。これ一つでぱつちり目が醒める。ベットから這いて、スリッパを履き部屋から出る。

キッチンに行くといつも通り父が私より先に起きていた。

「おはよ」私が父に声をかけるとやつと気がついたらしく「おっ。おはよう」つと元気に返して来た。

「まつてろ、今パン焼くから」

うん。と半端な返事をして私はテレビをつけた。朝のニュースを見る、七時五十分頃にやる血液型占いが本当の目的だがほんやりとほかの時事情報もチェックする。

「へへ。離婚か～」テレビを見ながらぼんやり呟いた「あれ。こ

の人三ヶ月位前に結婚したばっかじゃなかつたつけ？」お皿に目玉焼きとソーセージ、パンを乗せた皿を二つ持つた父がテーブルに着き言つた。

「え？ そーだつけ」父から一つのお皿を受け取りながら私は聞いた。

「もう駄目だな。年だから最近の芸能人の顔がみんな同じに見えてくるよ」小首を傾げながら言つた。

「まだ、四十そこいらの人間がなに言つてんの。あつ！」話しながら卵に箸をつけると、白い卵白の周りがたちまち黄色く染まつた。

「ちよつとーーー」れ半熟じゃん」眉間にこれでもか、と言うほど皺を寄せて言つと、父が覗き込んできた「あ。ほんとだ。こっちの方が固焼きだつたのか」と自分のお皿を箸で指しながら言つた。

「もー最悪」

私は昔から半熟の目玉焼きが大嫌いなのだ。でろでろしてて、喉に入れたら水分を奪われるし、全然食べた氣にならないし、何よりもお皿が汚れ、周りの食べ物まで黄色く染まるのがどうにも耐えられなかつた。

「年だからな・・・」年のせいにして逃げようとした父を睨み「まだ四十そこそこでしょ」と一喝した。

「まあ、まあ、いいじやないか残せば。おー、またイジメか」テレビに向かつて箸を振りながら無理やり話を逸らした。

「えー。イジメ位で自殺しちゃうのまたしても眉間に皺を寄せながら言うと「お前もイジメにあつたら、ちゃんと相談しろよ」と父が言つた。

「」心配なく。あつたとしても、自殺なんかしませんから」そう言いながらソーセージにかぶりつく。

「それに・・・」ソーセージを噛みながら付け加えた「お父さん一人にしたら危なそうだもん」

「あらま、栄ちゃんは優しいな」

おどけながら言つた父の言葉は本心だつたのかどうかは知らない

が、ちょっと照れくさくなつた。

私の家には母は居ない。死んだのだ。死んだと言つても本当に死んだわけではない。母はだらしのない人間で、父と一人で貯金していたお金をすつからかんにしてしまつたのだ。そして、それに父が激怒して離婚してしまつたのは言つまでもない。それ以来母には会つていな。私的には、死んだ人間も、もう逢う事がなくなつた人間もそれほど変わりはないと思つてゐる。それ以来家事は大抵一人で折半している。

「洗濯物。タイマーで栄が帰つてくる頃に終わるように設定したからあとは頼んだぞ」

血液型占いに夢中になつてゐる私の背中にむかつて言つてきた。

「はいは～い」と、形だけの返事をした。

「じゃ、お父さん行くからね。戸締りと、洗濯物頼んだぞ」

「はいは～い。いつてらっしゃい」

今日はO型は三位だつた。人との約束を忘れてしまわないように注意！それさえ守れば今日一日ハッピー。ラッキーカラーはピンク。こんな具合だつたので洗濯物のことを忘れないか心配になつた・・・

胸の穴（上）（後書き）

はじめまして。これから頑張って書きますのでよろしくお願ひします。
辛口な感想をちじてます。

文体、言葉回し、表現法、への批判。中傷なんでもOK。

胸の穴（下）

ガチャリっと、家の鍵を閉めて、鍵をポケットにしまった。私が住むマンションは十六階建てで、このマンションを建てる時には日照問題のことなどで近隣住民からは少々反感を買った。そこら辺の壁に「近隣住民から光を奪うつなー」とお決まりの文句が書かれた張り紙が貼られていた。そのマンションの三階に私の家はある。だから下までは階段で行くき、外に出る。しかも、徒歩一分もからずに学校へ着いてしまうといふなんとも学生にはラッキーな場所に佇んでいる。このマンションが市民の反対にも耐えて、建ってくれたことに心底感謝している。一個下の階には同じ学年の洋子が住んでいる。初めのうちは家を出る時間が一緒だったのでバッタリ会つてそこまでの距離だがなんとなく流れで一緒に学校に行つていたが、徐々に一緒に行くのが暗黙のルールと化していった。私が遅刻ギリギリの時間に家を出た日も一階のところで待つてくれた。

この日はちょっとと家を出るのが遅くなつてしまつたので一階のところでは洋子に会わなかつた。一階から一階に降りる。そこには洋子がいなかつた。少し不思議に思つたが風邪か、痺れを切らして先に行つてしまつたのだろうと思つた。

オートロックのドアを開き外に出る。もう、春といつよりは夏の匂いを含み始めた太陽の心地の良い日差しが体を包む。もう夏か・・・なんて感慨に浸つてゐる私に容赦なく鞭が入つた。学校から予鈴の音が響いてきたので、ヤバイと思つて走り出した。

私の学校には昇降口が三つある。一番正門に遠い一番奥の昇降口に三年生の下駄箱がある。真ん中の昇降口は裏門にも繋がつてゐる来賓用の下駄箱がある。そして、一番正門に近い昇降口が一年生と二年生の下駄箱がある。そのの一年生の下駄箱にある私の上履きを取り出し手早く履き替え、靴を下駄箱に入れる。ここからが大変

だ。一階には教員室、二階には三年生一年生の教室がある。そして私の一年生の教室は三階と、考えただけでため息が出そうな位置にある。一段飛ばしで、時には一段飛ばしで階段を駆け上がる。しかし、これだけではない、私の一年A組は長い廊下の一番奥に位置してるのでさうにせいかから走らなくてはならない。これだけで凄く体力が付きそうだ。

つと、走つてゐる途中でC組に入つてく洋子が見えた。

「洋子おはよ」つと走りながら声をかけた。

洋子が振り向く。つと、私の顔を見た途端に表情に雲がかかり、そのままうんともすとも返事もせずに教室の中に入つていった。気が付くと私は立ち止まつていた。は？と思ひながら数秒間唖然としていたが、本鈴が鳴り、担任の前島が私の教室から体半分出して「真鍋。早く入れ」と言つたのですぐに我に返つた。ヤバイ！と思ひまた走り出した。は？と思ひながらもはつきりと自分の胸にポツカリと穴が開いた感覚を覚えた。

息を切らしながら自分の席に崩れるように座つた。

「来来るの遅いよ、こんなに家近いのに」と、前の席の志保が声をかけてきた。

「志保が早すぎるんだよ、こんだけ家近いんだからもつとのんびり来ればいいのに」

私のマンションには、けつこう同じ学校の人間が住んでいて、志保もその一人だ。しかし私とは違い、予鈴の十分前には登校している。

「ギリギリで来るとエレベーター乗れなくなつちゃうんだもん」

「あー。だよね。私なんか三階だから階段でひよいつとこれちやうもん、だから気が緩んで家出るの遅くなつちゃうんだよね～、ちやんと朝は起きれるんだけど」

志保の家は十六階建てマンションの十六階で、景色が最高だ。しかし、同じ学校の人間が多く住んでるので朝はエレベーターの取り合ひになるので、早めに家を出ないとエレベーターを何分も待つ

ことになる。階段で行くにしても十六階から一階まで降りるのは朝の寝ぼけた体ではつらいものがある。

「あ、やっぱ、数学の宿題やり忘れた」頭の中でぼんやりと今日の時間割りを思い浮かべていたら思い出した。

「あ、私の写させてあげようか」

「ほんと。サンキュー」と言いながらかばんの中から真っ白な宿題プリントを出した。

私は自分でも自覚してはるほど八方美人だ。良い意味ではなく悪い意味で、そして一枚舌もあると思う。ある子が他の子の悪口を言つていたらそれに乗つかり、そのある子に悪く言われた子を褒める子がいたらそれに乗つかり、誰のつまらない話でも愛想笑を返す。良く言えば風当たりが良いのだろうが、私はこんな私を好きにはなれない。でも、私は私と決別はできない関係にあるから私は私であり続けることしかできない。こんなことを考えると毎回荒野の真ん中にポツリと置かれてどうにもできない気分になる。くつつくこともできず、離れることもできずただ中間でポツリと立つことしかできない。

四時間目は理科の時間に、意を決して洋子に会いに行こうと思つた。聞きたいことは沢山あつた。今日なんで先に来てたのか。一緒に学校に行くのはお仕舞いにするのか。なんで私を無視したのか。世の中には知らないほうが良かつたものが沢山あるが、このことはどうしても知つておきたかった。

チャイムが鳴り、起立、礼をして授業が終わる。理科は基本的に二階の理科室で授業が行われるので大抵はチャイムの前に授業をお仕舞いにするのだが、今日は実験だったので少し遅くなつた。三階の教室に帰るまでにそのことについて一人で少し愚痴つた。

三年生の廊下を歩く頃には話題は昨日のドラマの話に変わつた。ふと前を見ると洋子がミカと一緒に歩いてくるのが見えた。まだ洋子は私に気がついていない。心臓がキュッと閉められる感覚を

を感じた。徐々に洋子達との距離が近づき、すれ違う間近で洋子と田が合つた。

が、すぐに逸らされた。今朝開いた胸の穴が少し大きくなるのを感じた。追いかけて詰問しようかとも思つたがやめた。志保の前でそんなことをしたくないし、喧嘩中（と、言つても一方的に嫌悪されてしまつたみたいだけど）であることを感付かれるのが嫌だつた。

「私、洋子苦手なんだよね」

気まずそうにポツリと志保が言つた。

「なんで」意識した気はないが自然と声を張つてしまつた。

「なんかさ、一年生の時にはあんなじやなかつたのにや、一年生に上がつてからはじけた感じじやん。最近良い噂聞かないし、女子の間の番長つて感じが嫌だ」

「あ～。まあ、志保はちょっとそれ合わないかもね。ちょっと自己主張すぎる感じあるもんね洋子は」

「つてか」志保は私の耳元に口を近づけ「自凹かーー」と囁いた。

「たしかに」思わず笑つてしまつた。

「私がこんな風に思つてること内緒だよ」そう言つて志保は笑つた。

給食の時間も、五時間目も六時間目も記憶の中を探検したが望んでいた宝を見つけることはできなかつた。私は洋子になにをしたのか？なぜ嫌われたのか？似たような質問がさつきからずつと頭の中で右往左往している。

六時間目が終わり、帰りのホームルームまでの休み時間にトイレに行き、かえってきて教科書をカバンに詰めているときに手紙に気がついた。ラブレターなんかではない。女子特有の手紙の折り方だつた。

その手紙を机の下で誰にも見られないように静かに開いた。きっと、深いところにいる私は大方の予想をつけていたのだろう。そして、

その予想していたことがかいてあつた。再び私は静かに手紙をたたみ、ポケットの中にしまった。

胸にぽっかり開いた穴は面積を増し、その穴を冷たい風が吹き抜ける感覚をはつきりと感じた。そして、私は荒野の真ん中に立っていた。

私の場所（上）

からっぽの脳で家までフラフラ歩いた。と言つてもほんの数分の距離なのだが。オートロックのドアを鍵で開け、珍しくエレベーターで三階に昇ることにした。ボタンを押しエレベーターを呼んで、一階にエレベーターが来るまでの時間が私は嫌いだ。この空白の時間が無性にもつたない気がする。数分待つてやつと来たエレベーターに乗り「3」のボタンを押した。三階まで昇るのはあつという間だった。エレベーターを待つ時間などを差し引きするとやつぱり階段の方が早いなと思ったが、階段を上つている途中で洋子に会うのは避けたかった。

家の冷たい玄関のドアの鍵を差込み、捻る。ドアを開けて空っぽの家に「ただいま」と呴ぐ。返事はかえつてこないのを知りながら毎度やつてしまつ。自分の部屋に入りカバンをその辺に放り、ベットの上に崩れ落ちる。ポケットを探り、今さつきの手紙を取り出した。

ベットの上に仰向けになり手紙を天井にかざし、短い文面をしつかり咀嚼するようにゆっくり読む。

「いい加減。どんな人間にも良い顔をするあなたに愛想が尽きました。しかも、他人の秘密を軽々しく話す。近い内にあなたは空気になります。もう学校なんて来ないでね」

みぞおちの辺りが軋む。胸にポツカリ開いた穴を風がひゅうひゅう通り抜ける。また、元の通り手紙をたたみ直してポケットの中に入れた。

給食の時間からHRの時間まで記憶の中を探し回つても見つからなかつた宝のありがが分かつた。初めから自分自身のポケットの中に自分で入れていたのだ。初めから持つてゐるものをいくら探しても見つかるはずがないのに私は一生懸命探していた。今朝洋子に無視されたときから感付いていたが見て見ぬ振りをしていた。いや、も

つと深く言えば洋子の秘密を橋本弓子に話したときからいつかこうなるとは思っていた。しかし、そのいつかがこんなにも早く訪れるとは。

橋本弓子とは、同じ学年の洋子と同じクラスの女子だ。陽気でしゃべりで、物事への考えがいつだつて軽々しい。そんな弓子に洋子の秘密を話してしまったことは大誤算だと、話してしまった日から思っていた。洋子の秘密とは、三ヶ月ほど付き合っている彼氏とHしたことだ。別になんてことのない話だ。人間が生きていく過程の中での絶対必要な行為。そんなちっぽけなことを橋本弓子に話しただけで洋子は私をつまはじきにしようと目論んでいるのだ。

二三日前の話になる。私は駅ビルに参考書を買いに行って、たまたま弓子に会つた。そして、流れで一緒にマックに言つたのだが弓子は本当に良く喋る子だった。詳しい経緯は忘れたが、何かの弾みで洋子の話になつて、弓子が「なにかよーこの秘密とか栄知らないの？」

つと、聞かれたので思わず言つてしまつた。「うつそ」つと赤縁の眼鏡の奥で大きく見開いていた。すぐにヤバイと判断した私は「ウソウソ。噂だからこの話しには確証はないよ」つと慌てて付け加えたのだが結果的に最悪のパターンになつてしまつた。大方面白半分でこの噂が本当か嘘か洋子本人に直接聞いたのだろう。本当に物の考えが軽い。

ベットから身を起こしてベットの縁に腰をかける。「なぜ？」
「どう疑問は頭の隅の方にしつかり根を下ろした代わりに、「どうしよう」という戸惑いがさつきから頭の中を右往左往している。一週間もすれば今まで通りに私と接する人間は半分に減つてしまつ洋子の勢力はデカイ。よからぬ妄想が浮かんでは弾け、浮かんでは弾けを繰り返した。終いには「トウコウキヨヒ」なんて情け無い言葉まで浮かんだ。ダメだダメだ、と頭を振つて立ち上がつた。

私の場所（下）

家の鍵をかけて、階段に向かい階段を上る。四階・・・・五階・・・・六階・・・・七階・・・・八階からは壁の色がオレンジから灰色に変わる。その先も延々と階段を上り続けた。息が上がり、同じ壁、同じ階段が延々と続く為、精神的にも疲れてきた頃。ふつりと階段が切れた。はあはあと息を切らしながら廊下を歩くと、開けた庭園が目の前に現れる。このマンションには八階と十六階に子供が遊びのように庭園が設けられている。しかし、一年ほど前に幼児の転落事故があつた為、今では南京錠で入り口は硬く閉ざされている。しかし、その網のドアは中学生がよじ登れないほどではないので、中学一年生の頃にはよく悲しい気持ちになつたときに入っていたのが、一度管理人さんに見つかってこつびぞくしかられて以来ここには来ていかない。期間的に言つと半年近くになる。

金網に指を通して、数回揺らして容易には壊れないことを確認する。そして、背伸びをして高いところの網目に指を絡ませて、右足を南京錠をかけてあるところに足をかけ、一気によじ登つた。ドアの向こう側には整備された芝生と木製の椅子が二つのみで、他に特に何も無い開けた空間だ。一応、という感じで、私の肩位の金網フェンスが備え付けられている。

フェンスに近寄り金網に指を絡ませる。春の匂いを含んだ風の代わりに夏の匂いを含んだ風が吹き始めて、やはりまだ夕方だと風が冷たく感じる。ここへ来るとときにはエレベーターを使わないのがミソ。良い感じにつかれると妙な開放感がでてくるのだ。

赤く染まる町を見下ろしながらいろいろなことを考えた。これらのこと、いろいろな意味でだ。洋子のことに対すること、弓子のこと、登校拒否になつた私を父がどう思うか。もしくは私が学校でいじめられていたことを知つたときどんな顔をするか。本当にいろんなことを考えた。でも、それら全てが目の前の赤く染まる町の

中にゅつくりとゅつくりと解けて行き、そのうちに消えていった。

目をつむり、瞑想をする。実際にしたことはないし、してゐる人間も見たことが無いが気分だけそんな気分に浸る。心のドアを開け放ち全てを取り込む。不幸、悲しみ、不安、理想に現実。それら全てを集め、一つ一つ丁寧にちぎつて「無」に換える。

何分経つただろうか。しばらくして目を開け、決意を固めた。明日洋子に謝ろう。こんなちつぽけな理由で友情が壊く崩れ去つてしまふなんておかしな話だ、きちんと話し合つて謝れば洋子だって許してくれるはずだ。知り合つたのは中学生になつてからだから、たつた一年間の付き合いだが、大切な友達に違ひはない。

気が付くと、もう空は夜の準備に取り掛かっていた。最後に町を見下ろして帰ろうと思い、ふと下を見ると八階の庭園にも人がいた。顔ははつきりと見えないが同い年くらいだろう。目をしつかり開けてみていたつもりだが、突然ふつ・・・つと、その人は消えてしまつた。その瞬間ヒューと木枯らしが吹き、背筋がぞーつとなつた。なんだか怖くなつたので、来たときと同じ手順でさつさとフェンスをよじ登つてエレベーターホールに駆け込んでいった。

エレベーターの下のボタンを押してエレベーターが来るのを待つ。一番最上階といつものであつて、待つかと思ったが割りと早く来た。エレベーターに乗り込み「3」のボタンを押した。ゆっくりとドアが閉まり、階数字が十七・・・十六・・・十五・・・つと下つていく。八階で止まつたらなんだか氣味が悪いなど、エレベーター乗り込む前から考えていたのだが、十階の辺りからエレベーターのスピードが緩くなりだしたので、まさかと思っていたら見事に八階で止まつた。ゆっくりと開いたドアの向こうには誰もいない。

なんだよ、子供のいたずらか？と思いつながらすぐさま「閉」のボタンを押した。表面的には平然としていたが、内心は恐怖に震え上がっていた。再びゆっくりとドアが閉まりだしたときに突然細い指が閉まるドアを静止した。自分でもはつきりと感じるほど体が跳ね上がつっていた。

「すみません」つと紫縁の眼鏡をかけた女性が指の先から現れた。言葉に尖がつたものを感じたので、なんだか愛想の悪い感じの人だな。と思っていたらその女性は特に表情を変化させずに「あれ？ 鍋さん」と言つた。

私の名前を出した瞬間に初めて女性の顔をしつかり見て気が付いた。同じ学年の猪俣響子だった。驚いていたので言葉が出ず、目と指で、なんとか誰だかわかつたことを伝えた。

「これ、上？」と、相変わらず無愛想に尋ねてきた。

「違う。下に行く」まだドキドキしている心臓を一生懸命落ち着かせながら言つた。

「あ。そう、『ごめんね。間違えて上も下も押しちゃつたから、どちらだか分からなくて』形だけニコリと笑いながら言つた。

「あー。分かる分かる、私も時々やつちやつよ」へらへらと愛想笑いしながら言つた「んじゃ、また明日ね」手を振りながら「閉

のボタンを押した。でも、猪俣響子は振り返してはくれなかつた。

猪俣響子は一年生の秋に転校してきた。転校生は通常話題になるのだが、特に話題にもならず、学校の風景的存在へと化していった。印象的なのは紫縁の眼鏡くらいで、特に可愛いというわけでもなく特別不細工というわけでもない。転校してきた時から静かな子で、授業中、休み時間関係なく本ばかり読んでいた。しかも、分厚くて小難しそうなものばかり。いつも本にカバーを掛けているのでなにを読んでいるのかは明確には知らないのだが、雰囲気が醸し出している。

そして、転校生には噂も付き物である。流れた噂は、「イジメられっこ」だった、というなんともありがちな噂だったが、何処から湧いたかも知れないその噂は、一月も経たずに消えていった。でも、猪俣響子みたいのがいじめられていたと噂われるのは分からなくもない。自分だけの殻に閉じこもり、極力人ととの「ミニミニーション」を避けようとしている人間なのだから。

五階の辺りで再びエレベーターのスピードが緩くなりだし、三階で止まつた。エレベーターから降り、我が家まで歩く。ドアの前で止まり、ポケットから鍵を出し鍵穴に差し込み、捻ったときに初めから鍵が開いていることに気が付いた。一瞬鍵を掛け忘れたかと思ひ焦つたが、すぐに見当が付いた。鍵を引き抜きポケットに再びしまい、ドアを開けた。玄関には父の革靴があつた。

「ただいま」と、言つたときに大事なことを思い出した。

急いで靴の脱ぎ捨て、洗面所に駆け込む。そこには既に父がいた。

「おかえり。お父さんが先にやつてまーす」と言いながら洗濯機の中からTシャツやら下着をバスケットに入れている。

「ごめん。すっかり忘れてた」申し訳なさそうに言つと、父は二ゴリと笑いながら「お父さんが一人になつちゃうよりも栄が一人になつた方が危ないかもな」と言つた。

「うー。返す言葉がありません」と言つたら父は笑つた。

「んじゃ、ペナルティーとして今週末の掃除は栄に頼みます」

「えー。また私ー」と言いながら居間に歩いていく。

「だつたらちゃんと洗濯物ほしてくれよ」

「はーい」と、形だけの返事をして、テレビをつけた。

テレビには今朝やっていたイジメによる自殺事件が再び映し出されていた。そのニュースを見ていたら「人との約束を忘れてしまわないように注意! それさえ守れば今日一日ハッピー。ラッキーカラーハーフパンク」といつ、今朝の占いの言葉が浮かんだ。

夕飯のときも、お風呂に入っているときも、今学校で話題になつているドラマを観ていいる時も、ベッドの中に入つた後も、明日どうやつて洋子に謝るうか考えつぱなしだつた。頭の中で考えて、実際に頭の中で予行練習する。今浮かんだ案もダメ。そうしたら、今頭の中に描いた映像を払い落としてまた白紙に戻す。結果的には学校で和解を求めるのは無しという考えにまとまつた。言い争いになつて、周りの人間に私と洋子は喧嘩中という事を知られたくないなつたし、喧嘩中ということを知つたら洋子側に付く人間のほうが断然に多いはずだ。

結局長々と考えた末、結局一番最初に頭の中に浮かんだものにすることにした。考えがまとまつた瞬間に私は眠りの渦に飲まれ、すぐ眠りに落ちた。

いつもと変わらない一口が回り始めた。七時十五分に起き上がり、カーテンを開ける。窓から差し込む心地良い日差しの中で、伸びをひとつ。どんなに人間関係が歪んでも、いつもと変わらない朝がやつてきた。

ベッドから出て居間に行くといつもと変わらずに父がいる。

「おはよう」と、私。

「おはよう。今ご飯持つてく」と父。

今日の朝食はご飯だった。鯖のミソ煮、と言つても缶詰のものを皿に開けて温めただけだが。それとインスタントのお吸い物と白米。朝からよくやるなあ・・・と関心する。

父は学生時代に飲食店の厨房で働いていた。その為、味の事は抜きにして料理は好きなのだ。ありがちなエピソードだが、その飲食店でうちの母に出来つたのだ。しかし、母は一週間で根を上げて「辞めます」とも言わずに出ていったらしい。その後、数ヶ月ほどしたときに学校の中ではばつたり出逢つた。母は父と同じ学校の一個下

の学年の子だつたらしい。そこから色々と発展して、結婚して、今に至る。少し考えればルーズな人間かどうかは分かる気がするが、気の優しい父はそこをしつかり見抜けなかつたのだ。

父が両手にご飯茶碗を持って、キッチンから出でてくる。一つを私に渡して、一つは、父の手元へ。

「もう夏になるなー」と、父が独り言のように呟いた。

「その前に梅雨が待つてゐるよ。やだな～梅雨は」

「もう、栄も一年生の半ばに突入するんだな。来年になつたら愛験で遊ぶ暇なんてなくなつちゃうんだから、今のうちにいっぴ遊んどけよ。最近はどうだ？学校は」いやに父の言葉は私の痛いところを突付いてくる。

「うん？別に。至つて普通だよ」

「そうかそうか。あの～。なんだっけ？同じマンションの一階に住んでる子」

洋子のことだ。この質問は聞こえない振りをしてテレビを眺めた。もう、イジメによる自殺のニュースは報道されてはい、代わりに連續通り魔事件が取り上げられていた。人間の興味なんて右から左へとすぐに流れで行つてしまつものなのだ。だから大丈夫。洋子達の今回のこともすぐに終わつて、昔話へと変わつていくのだ。

「んじゃ、締り頼んだぞ。お父さん会社行つてくるぞ」

「はーい。行つてらっしゃい」いつもの血液型占いを見ながら、振り返りもせずに言った。

「遅刻しないよつにな」と言つて、居間のドアを閉めた。

今日の〇型は一位。ハッピーな一日。今まで溜め込んでいた問題が一気に解決！ラッキーカラーは赤。こんな感じだったので、洋子との和解に希望が持てた。

時計は八時を指さうとしている。いつもなら、八時二十分頃までのんびりしているのだが、今日はそもそも行かない。洗面所に行つて歯を磨き、手早く登校の準備をして家を出る。

いつものように階段を降りて一階に行き、階段に座り込んで待つ。ポケットから携帯を取り出して時間を確認すると、まだ八時七分だった。これからチャイムが鳴るまでここで洋子待ちだ。

最初は携帯のメールで謝ろうかと思ったが、なんだか気持ちの入つてない気がして却下した。結局、何時間も熟考した結果、一番最初に浮かんだ直接謝るという案にした。この階段はいつもの洋子の通学ルートだから、朝早くからいれば確実に会うことができる・はず。

八時十五分になった。さっきから階段を使う人に訝しい視線を投げられながらもじっくり待つている。いつもならそろそろ来る時間だ。

しかし、二十五分になつても来なかつたので腰を上げて登校することにした。きっと、エレベーターで行つたのだろう。こういうすれば違いを予想して最初は却下したのだ。

いつも通り校門をくぐつた辺りでチャイムが鳴つたが今日は走る気にはなれなかつた。

チャイムが鳴つてから五分以上遅れて教室に着いたときには担任の前島はもういなかつた。今日の私は遅刻だろ？

前島の第一信条はテキトウなのだ。「適」度に「当」たる適当ではなく、テキトウなのだ。適当よりもさらに腑抜けたかんじ。なので、遅刻も付けるのもテキトウ。

「あら。今日はやたらのんびりだね」と、志保が話しかけてきた。「今日はなんか走る気分じゃなかつたから」カバンを机に置きながらため息混じりに言つた。

「なんか、元気ないね」

「そう？ チヨーあるつもりなんだけど。今日、〇型一位だつたし

「あー、あの朝の血液型占いか。栄も良く見るね

「志保は全くそういうの信じないの」

「全然！ 信じない」と、きつぱり切り捨てられた。

「でも、気持ちが違つてくるよ自分の運勢の批評が良いと」

「まーせうだけじやー。それに・・・」

そのとき、チャイムが鳴つて数学の先生が教室に入つてきた。と、

同時に学級委員の子が「起立」と号令をかけた。

「〇型の人間なんていっぱいいるんだよ」それだけ言つてすぐ前を向いてしまつた。

私の頭の上には、マークが浮かんだ。いっぱいいるからなんだ、といふ肝心な説明が抜けた言葉を理解できなかつた。

授業中に洋子にメールを送つた。「話したい事があるから、次の休み時間女子トイレ来て」こんな感じの文面だ。

チャイムが鳴り、起立、礼をして授業が終わる。直ぐに立ち上がりトイレに向かう。

女子トイレのドアを開けると、誰もいなかつた。洋子が来るまで鏡で髪をとかして暇を潰した。

髪をとかして暇を潰すのにも限界が来た頃、「キイ」と、女子トイレのドアは小さく唸つた。

「話つてなに?」本当にめんどくさいとした顔で洋子が入つてきた。

来ないんじやないかと思つていたので、来てくれたことに少し安堵した。

「手紙見たけど。どうこいつ?」

「は?何の話」洋子は鼻で笑いながらそう言い放つた。ポケットの中から「これ」と言つて手紙を取り出した。

「知らないから。そんな手紙」眉間に皺を寄せて睨む。

「この字の感じと。この、ペンの色。こないだ一緒に文具屋で買つた珍しい色のペンじやん」そう言つと洋子は開き直つたのか「そういうことだけど?ちゃんと文字読めてる?」と言つた。

「わかつてるよ!」ついつい声を張つてしまつた「多分、弓子がなんか言つたんじやないの」

「なにを?」怪訝そうな顔で聞いてきた。

「なにをつて・・・」一瞬戸惑つたが「この手紙に書いてあるじやん」他人の秘密を軽々しく話す。といふところを指差して訴えた。

「は？別に、それはなんとなくそれっぽい文章いれただけなんだけど。」洋子の顔色が戸惑いの方向に少し変化した「つーか、あの喋りになんか話したの」

「え？」胸の穴がまたひょっこりと顔を現した。

「ミカとも前々からあんたのこと気に入つてなかつたからばぶいちやおつて話になつて、それで適当な理由つけた手紙いれただけなんだけど。実際に私のなんか秘密喋つたの？あんた」一步、洋子は私との間合いを詰めてきた。

私は戸惑いと焦りの中で言葉にならない言葉をボソボソと呟いた。

「は？何言つてるか聞こえないから」完全に洋子を怒らせてしまつた。だからといって私には何もできず、ただ戸惑いの中で視線を右に左に動かしていた。そのとき、洋子の顔に何かが浮かんだらしい顔になつた。

「もしかしてあんた、アノこと喋つたの」顔から怒りの表情がスルリと落ちた。

洋子の言つた「アノこと」と私が話してしまつた「アノこと」はきつと一緒なんだろうかんじたとき、我慢していたもの顔を伝つて流れた。それを見た洋子は、自分が言つた「アノこと」が私が弓子に話してしまつた「アノこと」なのだと判断したらしく、洋子の目からは怒りも憎しみ消え、温度のない視線がわたしには注がれていた。

一瞬のことだつた。頬が熱くなり、次の瞬間には痛みに変わつた。直ぐに、洋子が私にビンタをしたんだと分かつた。

「ほんとに死ねば」そう言つて洋子はトイレから出て行つた。チヤイムの音が聞こえた。でも私は左の頬に手を当てて泣いていた。泣きながら、今日の血液型占いの結果が頭に浮かんだ。志保が言つていたことが今ならなんとなく理解ができた。

「キイ」とドアが唸つたので顔を上げると、そこには猪俣響子がいた。

イジメ開始（上）

「何してんの？」相も変わらない愛想のない質問だった。

「別に」

「今野さんと喧嘩したんでしょ。なんか今野さん教室戻ってきたとき怒ってる感じだつたもん」

「・・・まあ、そんなとこ」今野さんは、洋子の上の名前だ。
「もうチャイム鳴つてるよ」素つ氣無く言いながら個室に入つていつた。

涙を拭いて顔を水で洗い、トイレから出て行つた。でも授業を受ける気にはなれなかつたので保健室に向かつた。

保健室には当然ながら先生がいた。机に向かつて何か書き物をしている。私は保健室に入り、ものすごく痛そうな顔で先生に「整理痛がひどいんで休んで良いですか」と言つた。

「あらほんと? とりあえずそこ座つて」そう言つて、書き途中のペンを置いて立ち上がつた。

手に錠剤を二つとコップを持つて私の前に来た。

「これ飲んで、一時間休んでだめそうだつたら、早退する？」

「や、とりあえず休んで、平氣そうだつたら教室戻ります」

「そうね。とりあえず、ベットに横になつてなさい」そう言つてひらひらと書き物の続きをやりだした。

私は手渡された錠剤を水で流し込んでコップを流しに戻してベッドに向かつた。ベッドが硬いのを除けば最高の空間だ。

ベッドの中に入つたら急に泣きたい気持ちになつた。不甲斐無さ? この先の不安? 色々なものが大きく見えて、それをひとつくくりにした良い説明が思い浮かばないが、無性に悲しくなつた。けれど、涙は堪えてとりあえず寝よう。それが結論だつた。

別にすごく眠かつたわけではないが、上下のまぶたをくつつけたら直ぐに優しく何かが私の手を引っ張つて、静かな真っ白な心地良

い空間にストンと落としてくれた。

そして、次の瞬間にはもう保健の先生が私を振り起こしていた。

「どう? 授業出れやつ?」

「や……ちょっと、今日はダメそうですね……」本当に痛そうな感じに顔を歪ませて言った。もぢりん嘘だ。

「そう。じゃあ、今日はもう帰る? 二時間目だけど

「はい。そうします」あくまでつらわうな顔で。

「じゃあ、早退届け書いておくから上行つて荷物とつて来なさい」

「はーい」そう言つてベッドから這い出た。

階段を三階まで上つて、A組の教室に入る。

「あれ? 栄どこ行つてたの?」

まだ、黒板の板書を書き写していた志保がきょとんとした顔で聞いてきた。

「保健室。今日はもう帰るのや?」

「え! なんで! ?」

「なんか今日、学校だるい」机の中から教科書を出しながら言つた。

「あのひと、どんな理由でもすべ帰してくれるよな。真面目に仕事やる気あるのかね?」

「そう? 私的には直ぐ早退させてくれる先生なんて最高だと思つけど」

志保みたいな真面目学生にはじこは分からぬのだ。

「じゃ。また明日ね」

「うん。じゃーね」

荷物を詰め込んだカバンを持って再び一階の保健室に戻り、早退届けの紙をもらつて、担任の前島に出しに行く。

「失礼します」

教員室の立て付けの悪い扉を開けた真正面の席が前島も席だ。

「お、真鍋どうした」

「早退するんで、この紙

早退手当てを前島に手渡す。

「おう、わかつた。気を付けて帰れ」

「はい。失礼します」

再び、立て付けの悪い扉を「ロロロロ」と閉める。

下駄箱に行き靴を取り替え、外に出る。午前中なだけあつて田差しが心地良い。

ふとグラウンドを覗いてみると組が体育をしていた。思わず洋子を探してしまった、今日は五十メートルのタイムを計る田だ。ざつと探した感じ居なかつたので恐らく、洋子は走るのが苦手だからきっと適当な理由で見学しているのだろう。

田線を前に向けて校門を田指す。と、校門の近くで一人の女子が居るのを見つけた。

歩を進めるごとに不安は大きくなり、まさか・・・という不明確な憶測はしつかりとした形へと変わって行つた。洋子とミカの顔がはつきりと認識できる距離まで来ると田頭が熱くなつてきた。

「さぼりかよ」

とんがつた言葉を先に投げてきたのはミカだつた。

「それとも」

洋子が声を発する。胸がキュッと締め付けられる。

「自分がどれだけ不要な人間か気が付いた」

ミカよりも尖つていて、刺々しい言葉を洋子はぶつけてきた。あくまで平静を保つて何もなかつたように洋子たちの前を通り抜け、校門を抜けた。我が家がもう直ぐそこなのが嬉しくて仕方がなかつた。気を抜くとまた目から涙が溢れてしまいそうだった。

いつものように階段を上がり、家の鍵を開けて家に入る。「ただいま」と呟く。

そうした瞬間に堪えていたものが目から溢れ出来た。玄関にしゃがみ込んで泣いた。

どれだけ時間が経つただろうか、携帯電話のバイブレーションが鳴つたので顔を上げた。きっと現実の世界では五分程度なのだろう

が、私の中では十五分にも三十分にも感じられた。

ポケットの中から携帯電話を取り出しディスプレイを見ると、洋子からのメールだった。少し固まつて考えたが、大体の内容の見当がついたので見るのを止めた。

靴を脱ぎ自分の部屋に入る。妙な懷かしさと安堵感が私の胸の穴を吹き抜けていく。

カバンとブレザーの上着を適当なところに置いてベットの上に横になる。

さっきの洋子の言葉を噛み締める。頭の中では根を下ろしたはずの「なぜ？」が再び舞い上がり「どうしよう」という戸惑いと共に脳内を駆け巡っている。考えれば考えるほど悪い方向に進んで行き、また涙が溢れてきた。「死」について考えた時の気持ちにちょっぴり似ている。考えれば考える程わけが分からなくなってきて、いたずらに恐怖という実態のない存在がどんどん肥大していく。

知らない間に眠ってしまった。

時計に目をやると時間は一時を少し過ぎたところだった。

ブレザーの中で携帯電話わやかましく音を立てていた。ベットから降りてカバンの側にあるブレザーの中から携帯電話を取り出す。着信履歴三件。Eメール件数三十二件。

胸の穴を風が寒々しくすり抜ける。しつかり携帯電話を握り締めていないと落としてしまった。

念のため送信者をチェックするとほとんどが当然ながらミカと洋子だった。その中にポツンと志保からのメールが一件来ていた。

「しね

「早く成仏してください（^――^）」

当たり所が悪く床に落ちた携帯電話から電池パックが弾け飛ぶ。ようようとベッドの縁に座りこんなに私つて涙腺弱かつたつけ？志保は洋子のこと嫌いなはずなのになんで？と疑問ばかりが頭の中で渦を巻いていた。

はじめ開始(下)(前書き)

感想募集中b(へ、)

はじめ開始（下）

暗闇の中を目線が彷徨う。毎晩あれだけ寝たのだから当然ながら布団に入ったところで直ぐには眠れない。さつきから何回も寝返りを打つていてる。

気が付いたら父が帰ってきていた。それからはいつも通りに時間がしつかりと流れていった。

いつも通り夕飯を食べてお風呂に入り、学校で流行のお笑い番組とドラマを観て、父に

「宿題はおわったのか？」

と聞かれて

「うん」

といつも通りに氣の抜けた返事をして、十一時にベッドに入つて今まで至る。

眠るのをあきらめて起き上がり、小窓のカーテンを開ける。
空には程よい光で満月が輝いている。太陽と似てるくせに太陽と違つてしまふと直視することができる。

このまま朝が来なければ良いのに・・・そんなことを一人の人間が望んでも一億人の人間が望んでも冷たくも朝は訪れる。

カーテンを閉めて再びベットに潜る。頭の中から志保のことが離れない。

なぜ？ どうして？ どんなに疑問をぶつけたところで空想の中の志保はなにも言わない。

カーテンの隙間から朝日が射す。壁に掛かっている時計に目をやる、時間は七時十五分。

結局寝たのは三時頃だったのだがさつきこの時間に起きてしまつた。

いつも通りにカーテンを開け伸びを一つするが気だるさは抜けない。睡眠時間が少ないからではなく、きっと精神的な部分から来て

るのだれうと思つ。だるい体をいやいやながら持ち上げて居間に行くといつも通り父が朝ご飯の準備をしていた。

「おはよ

「こつもよじ更に低いトーンで言へ。

「おう。おはよ」

いつも通りの朝の光景。でも、それも今のつか。一時間後には昨日とはなにもかもが違う今日が流れだす。

「今田はちゃんと半熟と固焼きは間違えてないぞ」

そう言つていつも通りのソーセージと目玉焼きが乗つた皿を差し出した。「つか、間違えることが信じられないから」

そう言いながら橋を黄身に刺すと中から黄色い液体が流れ出て来た。「ねぎとせりてるの?..」

「んじや、お父さん会社行くから『締まりとか頼んだぞ』

「はーい」

いつもの様に血液型占いをみながら氣のない返事を返す。もうこんな占いなんか信じる氣はないが、形だけ見ておく。

「あ、それと」

ケツポケットから財布を出して、そこから2000円程出して「今日帰り遅くなりそうだから適当に食べておいてくれ」

そう言つて食卓の上にお金を置いた。

「じゃ、行つてきまーす」

「行つてらっしゃい」

今日のO型はビルだった。

時計は八時を指している。学校に行くのが非常にだるい。まだパジャマを着たままだらけているのが何よりの証拠つある。

「ヒキコモリ」

そんな言葉が頭の中を右から左に流れ、胸に空いた穴を風がすり抜ける。

気が付けば立ち上がっていた。ひきこもりなんて絶対かんべんだ。

ほかの学校はどうなのだから知らないが、私的にはうち学校は登校拒否児が多いと思う、うちの学年はひとつクラスに一人程度はいる。うちの学年は五クラスあるから、十人程度だ。理由はいじめが主だが、一年生の初めに少し来て来なくなつた生徒もいる。恐らく小学校の時から不登校気味だつたのだろう。はつきり言つて、私はその生徒達を嘲笑していた。

ひきこもつたらいじめっ子に負けを認めたことになるし、親や親類にいじめられていたことを知られて恥ずかしくないのか？

そういうことを考えると絶対にひきこもりに、登校拒否児にはなりたくない。

結局家を出たのは八時二十分だつた。丁度マンションを出た辺りで学校から予鈴の音が聞こえる時間だ。

いつも通りに階段を使って一階まで行つて、オートロック式の扉からである。

予想通りマンションを出た辺りで予鈴が聞こえたが今日は走る気にはとてもなれなかつた。

ゆつくりと歩いて一年生の昇降口に向かつ。下駄箱に近くなる程不安が大きくなる。もしや、上履きが無いかも…という不安があつた。

が、下駄箱の前まできたら不安は飛んで行つた。

上履きはいつもと同じ形でいつも通りにあつた。念の為、上履きを逆さまにして画鋲が入つていなか確かめた。

さすがにそんなちんけな仕掛けはないか、と思わず鼻で笑つてしまつた。

右足から靴を脱いで上履きを履き、続いて左足を上履きに突つ込む。

その瞬間体に電気が走つた。

「つ……」

つと、言葉にならない低い呻き声をあげてすぐに左足を抜いた。

白い靴下の親指の部分がたちまち血で赤く染まる。

ぶつきらぼうに上履きを拾いあげる。上履きのつま先の部分に

待針が刺してあつた。

痛いからではなく無性に泣きたくなつた。

はじめ開始(下)(後書き)

どよ？これ？感想

評価募集中b(^ ^)

階段に座つて靴下を脱ぎ、生徒手帳の中に入れて置いたバンドエイドを取り出して足の親指の先に貼る。あまり深くは刺さつていなかつた様で、血は大体治まつて来ていた。

親指の部分だけ赤く染まつた靴下を再び履き直し、なんの細工もかかつていない上履きを履いて階段を登り始めた。

教室に着いた時には一時間目の数学の授業が始まつていた。

「真鍋。遅いぞ」

と言われたが軽く会釈だけした。

遅れて教室に入つて来た私を見るみんなの目がやたらに突き刺さる。昨日、一昨日までは極普通に感じていたみんなの視線が痛い。席に向かつて行く途中志保と田が合つたがすぐに外されてしまった。

席に着いて鞄を置き、机の中から教科書ノートを出そうと思つて手を入れると予想通りの物が沢山入つていた。そのなかの一枚を取り出し広げて見る。

「死ね」

太いマジックでしつかりと書かれている。

その紙を机の中に戻して他の紙と一緒に机の奥に押し込む。と、その時に机の中に入つていた教科書ノートが全部ないことに気が付いた。持つて帰つたのかと思つて鞄の中も調べてみたがない。犯人は洋子だ。

とりあえず代用のノートを出して板書を書き写し、極力問題を当てられない様に、授業の大半は机に突つ伏して過ごした。

数学の授業も無事終わり、休み時間になると、小野幸子が私の席に來た。

小野幸子、雨宮縁、中西美郷はどこの学校にも必ずいる漫画やアニメ好きの、言わばオタクの地味なグループである。

幸子とは小学校の六年間同じクラスであったが、全く関わり合ひはなかつた。

「何?」

「洋子の話」

「え?」

幸子の口から洋子の名前がでてきたことに驚いた。

「栄、洋子と喧嘩してるね? つて言うか……」

その先を気まずそうに濁したので

「はぶかれてるよ」

とそつけなく言つたやつた。

「やつぱり」

少し気まずそうな顔をした

「昨日から結構洋子とミカが女子に声掛けてるんだよね。昨日途中で栄帰つたから知らないと思うけど」

胸にぽっかりと空いた穴を風が吹き抜ける。驚きに顔を歪めたくなつたが、幸子にはなぜだか弱いところを見せたくなかつたので頑張つて平静を保つた。

「関係ないよ」 あくまで平静に、幸子とは田線を合わせずに遠くを見つめる田で言つた。

「え?」

「別に洋子達にはぶかれたつて関係ないよ」

「でも、きっとみんな洋子について、栄みんなにはぶかれる」とことなるんだよ?」

「「」の話に……」

遠くを見ていた田線を幸子の田線に合せる

「幸子はもつと関係ないよ」

幸子はきょとんとした顔をした。はつきり言つて、ありがた迷惑なのだ。はぶかれたからってこんなグループに入るのは御免だ。

「幸子も私なんかと仲良くしてると洋子達にシメられるよ

顔に愛想笑いを貼り付けて言った。

「辛くなつたらいつでも私達のグループおいでね」

困つた様な顔をして幸子が言つたが、微笑むだけで何とも言わなかつた。

今日はその会話意外に誰とも喋らなかつた。給食の時間も黙々と食事をして、昼休みは寝て過ごした。

洋子には一度も今日は会わなかつた。だから、いじめらししいじめは基本的には今朝のあれだけかと思っていたが、帰りに大きいのをひとつやられた。

靴がない。

両方ではない。片方だけがなくなつていた。

その残つた一足を手に取つて走つた。家まで数メートルの距離を全速力で走り抜けながら、自分の物は肌から放してはいけないということを脳裏にしつかりと烙印した。

マンションのオートロックドアを開けて、階段を一段飛ばしで登り、家の鍵を素早く開けて、何かから逃げる様に家の中に滑り込んだ。

上履きも脱がず、ただいま言わないで部屋に入り、肩で息を切りながらベッドの縁に座つた。

何を見るでもなくぼーつした。もう、泣くのも現実逃避の様に寝るのも嫌だつた。

そう思う私自身の理性とは反対に感情は素直で、気が付けば頬を一筋の液体が伝う。そのまま横になつて、暗い沼地に足を沈めた。

目覚めて時計をみると五時前だつた。

重い体を起こして立ち上がり、家を出ようとした時にまだ上履きを履いていたことに気が付いた。そして運動靴がないことも。

靴棚を開けて代用の靴を探したが、面倒だったので上履きのまま飛び出して。

いつもの様に階段を登つて、16階を目指す。

いつも通り八階から壁の色が変わり、あと半分で最上階といつこうとをさり気なく私に教えてくれる。

十六階に着き、息を切らしながらいつも通りフェンスを乗り越える。私だけの安息の地が私を優しく包み込む。

今日は快晴だったのも相成つて、夕焼けがはつきりと真っ赤に自分の存在を主張していた。

ポケットから携帯電話を取り出してカメラモードに切り換えて、肩程の高さのフェンスから背伸びをしてなんとか携帯電話をフェンスの向こう側に出して、構える。

と、その時、携帯が鳴った。無理な体勢で構えていたこともあり、携帯が手から滑り落ちた。

手から離れた携帯電話は微弱に風に流されながら下へ下へと落ちて行き、八階の庭園に落ちたようだつた。

恐らく壊れてしまつただろうが、大して悲しくはなかつた。むしろこれ以上メールや電話が来ないことに安堵感さえ感じた。

でも一応確認しに行こうと思った時、あの日と同じ様に人がスッと通つた。顔から血の気がすーっと引いて行くのを感じた。来たときと同じようにフェンスを越えてエレベーターホールへと行き、下ボタンを押してエレベーターが来るのを待つ。幾分早く来たエレベーターに乗り込んで「ハ」のボタンを押した。この間と同じく八階が近づくにつれて鼓動が微妙に早くなる。チン。という音と共にエレベーターの扉がゆっくりと開いた。

八階の庭園に行くと、ベンチに人が座つて本を読んでいた。八階の庭園には來たことが無いのだが、十六階の庭園と大して代わり映えは無かつた。庭園の入り口のドアを見ると、南京錠が外されていた。

扉を引くとキイと鈍い音を立てた。その音に反応して本を読んだいた人が、本から顔を上げ、こちらを見て來た。なんだか見覚えのある顔だつた。

「なんか用？」

尖つた声で誰なのがわかつた。猪俣響子だ。

「上から携帯電話落としちやつてさ。猪俣さんわ何してんのこいで？ てか、なんで鍵あいてるの？」

「何してるかは見れば分かるでしょ」と言つて、本をヒラヒラと振つた。「鍵が開いてることは秘密。たぶん携帯は壊れてるよ、あっちにあるけどね」と、芝生の方を指差した。

指差された方の芝生に向かつて歩く。携帯はあつたが、当たり所が悪かつたらしく見事に真つ一つに割れていた。その側に花束が置

かれて いるこ とが 気になつた。

「何この花束」猪俣響子に聞いてみる。

「事故で死んじやつた子の花束」再び本に目を落とした猪俣響子が素つ気無く答えた。

「あ、そ うなん だ。なん か、ま ずい こと 聞いた 感じだね」

「私 たちの 子供 じや ないし 別に。それ に・・・」そこまで言つて葉を切つた。

私はフーンス越しに、いつもとはちょっとびり低い位置から赤く染まる町並みを眺めた。観てるものは一緒なのになにか違う感じで、私にちょっとびり似ていると思った。

「猪俣さんはいつつも何 読んでるの?」

「いつつもって・・・その時によつて読む本なんて違うに決まつてんじやん」

「大体だよ、大体。中心てきな主類とかあるじやん」

「哲学」一言だけでいつもにも増した素つ気無く返してきた。

「へー。よく読めるねそんなの」

「別に。なんとくな部分が多いけど、言いたい事は大体分かるよ」

「隣座つて良い?」

「勝手にすれば」

「んじや、お言葉に甘えて」人一つ分のスペースを開けてベンチに座り「ちなみに、何 読んでるの?」と本を覗きながら尋ねた。

「多分言つても知らないよ」

「私だつて少しは知つてるよ。一一チヨとか」

「ショーペンハウア」本から顔を上げて言った「知らないでしょ」「誰?」

「ショーペンハウア『存在と苦惱』。生きる」とを苦とする哲学者で、一一チヨの考え方とはほぼ真逆な考え方

「へー。面白いの」

「分かればね。私はこの人の考え方が好きだから、この本はもう四回

「ふーん。私にも読ませてよ」

「は？」紫縁の眼鏡の奥で眉毛を寄せた。

「だから。私も読みたい」

「ほんとに読むなら好きにすれば」と言つて、本を閉じ私に差し出した。

「え？」

「読むんでしょ？」突然目の前に出されて戸惑つている私に言つた。

「うん。読むけど・・・途中じゃないの？」

「もう三回も読んでるから別に。どうせ途中で諦めるだらう」

最後の一言に少々ムツとしながら受け取り「ありがとう」と言つておいた。

「私帰るけど、真鍋さんどうする？」

「あ。じゃあ、私も行く」

一緒に扉から出た。猪俣響子はポケットの中から南京錠を取り出してしつかりと施錠した。

「じゃ。私階段で帰るから」と言つて階段のところで別れた。

「じゃあね」と言つて、私はエレベーターホールに向かう私の背中に「あ。あと」と猪俣響子が言葉を投げてきたので振り返つた。「オーストリアかスイスつて感じだよね」それだけ言つと猪俣響子は階段を上りだした。

言われた意味が分からぬ私の頭の上にはクエスチョンマークが沢山浮かんでいた。なんで、南京錠の鍵を持つてるかなど、猪俣響子に対しては疑問ばかりが浮かんだ。

今思つてみたら、今日まともに会話したのはこれが初めてだった。

雨音が部屋にこだまする。

この三日間雨は飽きることなく私の町を濡らし続けている。梅雨の季節になつてもイジメは続いた。イジメと言つても基本的には「はぶ」にされているだけなので慣れたくは無いが、大分慣れた。お父さんは相変わらずこういうことには鈍く、なにも気づいていない。携帯電話は解約してしまって結局新しいものは買つていらない。もうすぐ受験だから。と適当な理由をつけて買つてもらわなかつた。猪俣響子とはあの日以来話していない。借りた本はあと数ページで読み終わるのだが、ちんぷんかんぱんだ。読んでは戻つて、戻つては読んでを繰り返している。でも好きな文章は見つけられた。

「われわれは、物を食べたり、眠つたり、暖をとつたりしては死と格闘するのだ。結局勝つのは死である。なぜなら、われわれは既に生誕とともに死の所有物となつたからである」

当たり前のことだが書いてあるだけなのに胸にぐつとくる。こんなことを意識して生きていなかから突然目の前に最終的な終着点を押し付けられて、妙に世界が狭まつた感覚に陥る。

雨の日は本を読んで、晴れの日は本を買いに行く。

この数ヶ月で格段に私の読書量は増えた。薄っぺらな文庫本なら一日であつたりと読んでしまう。昔の私なら一週間かかつても読み終えることはできなかつただろう。

学校でも放課後でも話しが居ない私は文字で胸に空いた隙間と時間を埋める。猪俣響子がずっと本ばかりを読み続けて居る意味が分かつた。

洋子とミカは完璧な問題児になつた、学校には週に一回位しか来なくなつた。

だから周りの女子は私を

「は、ふく」

ことを止められないのだ。話したら今度は私が・・・みたいに思つてゐるのだろう。

ベットに寝転んで本を読む。あと数ページで読み終わる。全部読み終えて猪俣響子に返したら彼女はどんな顔をするだろうかと、少し考えたが多分いつも通りの無愛想な感じだろうと思つ。

そんなことを考えていたらまた話の筋がわからなくなつた。

最後の一ページをめくる。小説とは違ひなんのオチもないためか、なんとなくあつけない終わり方に感じた。それと同時に妙な解放感を得た。

「やつぱり私に哲学なんて向かないなあ～」

と、わざと声に出して言つ。私なんかには哲学よりも、直木賞とかを取つてゐるミーハーな感じが似合つだらう。

本を閉じて勉強机に置く。窓を開けて外を見ると雨は上がつていつたが、まだ空には重たい雲が掛かつてゐる。

ほんやりと猪俣響子のことを考えた。今日も八階の庭園にいるのだろうか？猪俣響子と無性に話したい。久しづりに友達と話したいとかじやなくて猪俣響子と話したい。同じ

「いじめ」

という痛みを感じたことのある猪俣響子と……

気が付くと窓を閉めて立ち上がつてゐた。それから、適当なトートバッグに本を入れて家をでた。壁の色が変わる境目でストップ。八階の庭園に行つてみたが当然ながらという感じで猪俣響子は居なかつた。

少しの間、しっかりと施錠された南京錠をほんやりと眺めた。さすがに雨が上がつたばかりではいなくて当然だ。そう思つてその場を後にしてエレベーターホールに向かつ。

下のボタンを押してエレベーターが降りてくるのを待つた。一番端っこにエレベーターが十階から降りてくるので、そのエレベーターの前に移動する。

「九…ハ…と降りてきたエレベーターの中には見慣れた人間が乗つていた。

「あら。 真鍋さん。 何やつてんの」

別に興味はないが形として聞いている感じで言われた。

「や、庭園行つたら猪俣さんいるかなつて」

「なんだか妙に恥ずかしくて言葉のお尻のほうは縮こまつてしまつた「ふーん。なんか用？」相変わらず無愛想に尋ねてきたが「まあ、いいや。これから行くところだからくれば？」と言つた。

「あ。うん」という私の返事もろくに聞かないで猪俣響子は歩き出した。

手馴れた手つきで南京錠に鍵を挿して開錠する。「ないだの時と同じようにキイと、扉が小さく呻いた。二人でベンチの前まで歩いたが、当然のことながらベンチは濡れていた。

「ふう。で、なに」

全くベンチが濡れていることなんか気にせず猪俣響子はベンチにもたれかかった。

「あ。本読み終わつたから返そつと思つて」

私も、お尻が濡れるのを気にしながらもベンチに座つた。

「え。ほんとに。やるじやん」

想像していた事とは違い、やわらかい笑顔で猪俣響子は私を褒めてくれた。

「でも、なんだかあんまり理解できなかつたよ」

猪俣響子に褒められて、なんだか少し恥ずかしくて目を見て話せなかつた。

「ふつ。 そんなもんでしょう」

そこからは取り留めの無い話しが延々と私が一方的に話した。猪

保響子は、持つて来た本に目を落として、私の言葉に、うんうん、と相槌を煩わしそうに、でも優しく打っていた。

話しのネタが尽きて、妙な沈黙が私たちの前に降りて来た。

「ねえ」

と、先に口を開いたのは私だった。

「こないだ言ってたスイスだかなんとかってどういうこと?」

本から顔をあげて、しつかり私の目を見据えて短く一言

「永世中立国家」

と言った。

永世中立国家と私（下）

「えいせこちゅうりつこいか？」

猪俣響子が口にした言葉と同じように言つたつもりだったがなんだか間の抜けた感じになってしまった。

「知らない？」

と訊かれたので首を横に振つた。

続けて

「知りたい？」

と訊かれたので今度は首を縦に振つた。

「ふう。という感じで本を閉じて話し出した。

「永世中立国家っていうのは、もし多国間で戦争が起にしても中立の立場である事を宣言して、他国がその中立を保障・承認している国のこと。軍事的な同盟国がないから、他国の軍事攻撃に遭つた時でも自国のみで解決しなければいけない。そういう側面もあるから強力な軍隊を組織している国が多いらしいよ」と、一息に言い切つた。

「つまりどういふこと？」

猪俣響子は柔らかく説明したのだろうが核心的な部分が避けて話されていると私は感じた。

「イスラエルとかオーストリアとかがそれを宣言してるの」少しムッとした感じの目だった。

「つまり私が猪俣さんの田にはその中立国家みたいに映つてゐることなの？」

「まあ。そういうと」

私の目から視線をはずして遠くを見ながら一言

「いじめられてるんでしょ

と加えた。

胸の中が妙にざわついた。他人にしつかりと激みなく言われたの

は初めてだつた。

「今まで広く浅くみたいなかんじで中立の立場で接してたけど、いざ『いじめ』っていう名の他国からの攻撃を受けると誰からの援助もなく自國だけで解決しなければならない。そん感じでしょ」

再び私と目を合わせた。すごく冷たく挑戦的な目をしていた。

「じゃあ」と、声を発したつもりだったがうまく出なかつた。咳払いをひとつして仕切りなおす。

「じゃあ、猪俣さんはどうだつたの？」逆に挑戦的な視線を投げかける

「なにが？」眉間に皺を寄せた。

「昔」声が濁む「猪俣さんもいじめられてたんじゃないの？」

口に出したら妙に胸がすつきりした。猪俣響子の顔が歪む。

妙な沈黙が再び二人の間に割つて入つてきた。一分だらうか？ 十分だらうか？ 一時間だらうか？ 嫌な時間がゅっくりとスライドして行く。

「なにそれ」遠くを見ながら短く猪俣響子が言つた。

「なにそれつて？」

「私がいじめられてたつて話。別に好きで一人やつてるつもりなんだけど」と早口にまくし立てた。

「今の学校じゃなくて、前の学校の話なんだけど」と少し氨基いを感じながら何とか発した。

「前の学校でもいじめられてないし。変な噂流さないでくれる」

そう言って立ち上がりて南京錠を私に放る。

「私先に帰るからちゃんと閉めて行つてね」と言つてそそくかと歩いていった。

「何？逃げるわけ？」

扉を開けて出て行く猪俣響子の背中に言葉を投げた。しかし、振り返りもせずに行つてしまつた。

本を返し忘れたのを思い出した。

猪俣響子が出て行つてから少ししてから私も出て家に帰つた。お父さんと一緒にごはんを食べて、お風呂に入つて、お笑い番組を見て布団にはいつた時に自分の言つたことを悔やんだ。

「変な噂」最後に言つた猪俣響子の言葉がリフレインする。確かに変な噂だ。明確な根拠もない。誰かが流して、気がついたら風化して影も形もなくなつたものを私が勝手に蒸し返しただけだ。

寝返りを打つ。明日も時間通りには起きれないだろう。みんなに無視される孤独感から引き起こるストレスで体のバイオリズムは少しづつ崩れはじめている。前髪を下ろしているからあまり目立たないが、おでこにニキビが二三個できてしまった。

羊を数える。一匹・・・・・一匹・・・・・頭の中でもこもこの羊が柵を飛び越えてフュードインしてそのまま左にフュードアウトしていく。昨日は112匹数えたところでやつと眠りに落ちることができた。今日は何匹で眠りに落ちることができるだろうか。

柵を羊が越えて視界に入り消えるとまた同じ要領で羊が通り過ぎて、しばらくして羊が歪んで瞼の裏の暗闇に溶け込んでいった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4222a/>

中立国家の私

2010年12月14日17時13分発行